

## 博士論文要旨

看護学研究科博士後期課程	学籍番号 D18501 氏名 安達寛人
論文題目	うつ病をもつ人における自殺再企図の経験
<p>【目的】うつ病をもつ人における自殺再企図の経験について明らかにし、自殺再企図を予防するための看護への示唆を得ることである。</p> <p>【方法】うつ病または抑うつエピソードをもつ双極性障害と診断されて外来受診を継続しており、自殺企図を2回以上繰り返した人を条件として、自殺企図の経験について半構成的面接で語ってもらいデータとした。分析は、Giorgiの科学的現象学的アプローチをもとに行った。本研究は「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に則り、新潟県立看護大学倫理委員会の承認（承認番号：019-12）を得て実施した。</p> <p>【結果】対象者は5名であった。平均年齢は44.6歳、自殺企図回数は2～5回であった。対象者は、職場や家庭におけるネガティブなライフイベントが続いたことでうつ病を発症していた。サポート不足のまま抑うつ状態を強めていき、心理的な苦痛の蓄積によって【制御を超えた閉塞的状況の持続によって自殺に追い込まれ】ていた。死ぬことが解決方法であると考えた状態で引き金となる精神的な揺さぶりがあり、苦痛からの解放願望を伴った死への欲動と死を推測できる手段や状況が合致したことで【つらい現実からの解放を求めた衝動的な自殺行動】を起こしていた。冷静な状態では死への恐怖を有していたが、自殺を決意した後は【死への欲動に駆られた自殺行動への突進】に至り、途中で思いとどまることなく死に向かって行動していた。死への欲動に駆られて自殺を試みてはいたが、迷いや現世への心残りを有しており【確実な死の決行に対する意識・無意識の撤退】をしていた。結果、自殺未遂に終わる一連の経験が繰り返されていた。</p> <p>【考察】うつ病をもつ人の自殺ハイリスク状態は、自殺再企図に至った時点においても持続していた。心理的な苦痛の蓄積から再び視野が狭まった状態に陥ったことで唯一の解決の方法が自殺であると考え、自殺再企図につながったと考えられる。また、自殺再企図をしたうつ病をもつ人は、完遂が可能と考えられる自殺方法を把握していたが、実際には身体的苦痛を許容できる自殺方法を用いていた。死を意図した行動を起こしながらも、生きたい気持ちや救いを求める気持ちをもっており、死にたい気持ちと生きたい気持ちの両側面を同時に有していたことで、意識・無意識的に自殺の決行から撤退していたと考えられる。</p> <p>【結論】自殺再企図をしたうつ病をもつ人は、自殺再企図の時も自殺ハイリスク状態が持続しており、自殺を試みた後も根本的な問題が解決していない状況にあった。自殺予防支援として、自殺企図という現象をありのまま当事者の視点で理解しようとする態度を持ち、当事者のつらい気持ちや自殺行動に関する心境等の経験を聴くことで精神的苦痛の軽減や苦悩の焦点を捉えるよう努めること、そして個々の生活状況や認識に合わせたマネジメントを実施していくことが重要である。</p> <p>キーワード：うつ病，自殺再企図，経験</p>	